

米国の幼児特殊教育領域における家族支援に関する検討（2）

～個別家族サービス計画（IFSP）の制定後の動きに注目して～

○TRAN NGOC TRA MY

（千葉大学教育研究科）

真鍋 健

（千葉大学）

KEY WORDS: 家族支援 アメリカ乳幼児特殊教育 家族中心アプローチ

1. 目的

障害のある子どもに対する早期発見や支援は以前から重要視されてきた。その過程で、家族は大きな役割を果たしている。現在では、幼児期特殊教育（以下 EI/ECSE）において、家族中心アプローチが世界中に活かされている（Garcia-Grau et al., 2019; Vilaseca et al., 2019）。日本でも、家族中心アプローチにシフトしようとしているが、現場ではまだ多くの課題に直面している（船越, 2011; 一瀬, 2012）。海外を見ると、米国は早い段階から EI/ECSE の家族支援制度を設け、1986 年に 0～3 歳の障害児に個別家族サービス計画（以下 IFSP）が障害者教育法改正—P.L. 99-457 で制定された。1980 年代は大人主導で介入を行ってきたが、1986 年 IFSP 以降、主流のパラダイムは子どもの家族を対象とした支援へ移行した。しかし、その変容がどのようなプロセスであったのか、またその変化の要因はどのようなものだったのかは十分に検討されていない。

そこで本研究では、その領域の第一人者であった Dunst らの家族支援に関わる理念・モデル等に注目し、そのプロセスと変化要因を明らかにすることを目的とする。

2. 対象および方法

本研究では、主に Carl Dunst という研究者と彼のチームに着目する。なぜなら、彼らは EI/ECSE で家族支援に関する多くの論文を発表し、アメリカ全土に使われている特殊児童協会下位部会の幼児期領域部門による『推奨する実践』（以下 DEC の RP）での家族に対する実践を作成し、この分野の第一人者だといわれているからである。

本研究の方法として、Dunst らの研究から家族に関するものを選抜し、時系列的に分析していく。データは主にジャーナルおよび書籍で収集し、Dunst らが提唱したモデルやアプローチとそれらの発展過程に焦点を当てる。

3. 結果および考察

IFSP の制定以降、P.L. 102-119 や P.L. 105-17 等で、家庭を含めた自然な環境に関する規定も家族支援に大きく影響した。これらの法律および Dunst らの提唱したモデルやパラダイムの変化と発展の段階は Figure 1 のように、萌芽期—成長期前半—成長期後半—成熟期でまとめられた。

Dunst は 1985 年に Proactive Empowerment through Partnerships (PEP) モデルを通して、初めて EI/ECSE に Bronfenbrenner の人間発達生態学などのシステム理論を

用いて、介入が子どもだけでなく家族全体のニーズや機能スタイル、持っている力や資源などにも注目し、パートナーシップとエンパワーメントを促進するべきだと指摘した（Dunst, 1985）。1986 年、IFSP が義務化されたが、Dunst らは、IFSP の内容や実施に実用性や専門家の優位性等に違和感を覚え、より家族に寄り添い、柔軟で効果のある支援計画を自分なりに追求した。同時に、彼らのモデルも他の研究者に指摘された（Feldman, Ploof & Cohen, 1999; McWilliam, 2010）。例えば、フィロソフィーに偏り、根拠が少なく、欠損に注目しがち、問題を無視し、家族を主張すぎる点があげられた。そういった経験を踏まえ、Dunst らは EI/ECSE のみならず他分野からの理論も取り上げながら、自らのモデルを改善しつつ、近年では様々な研究成果や理論をいかしたキャパシティ・ビルディング家族中心モデルを統合した。このパラダイムからみると、子どもと家族が多様な能力と強みを持ち、家族が介入に関する様々な決定ができるように、介入の重点が公式・非公式支援と資源を通して、家族メンバーのコンピテンシーと肯定的な機能をサポートし、促進することが重要である。

30 年間以上にわたり、彼らの研究は PEP モデルの有効性を証明し、より完成させてきた（Dempsey & Keen, 2017）。現代でも、彼らを取り上げた家族中心やキャパシティ・ビルディング、家族と専門家のパートナーシップがキーポイントになっている。このように、Dunst らの理念は EI/ECSE における家族支援の変化要因の一つだと考えられる。また、その背景には、Dunst らが大量のエビデンスや理論とともに、家族支援の重要性と当初示した支援の方向性を実証し、モデルの構築—再調整を今に至るまで積み重ねてきたのが一つだろう。これは容易なプロセスではなく、Dunst らは他の専門家による自身のモデルへの批判や彼ら自身の IFSP に対する抵抗感、反省等の衝突を乗り越えた成果である。今後さらに米国の EI/ECSE における家族支援を考察していく上では、次の検討が必要である：①Dunst ら以外の研究者の動きや研究者間の議論、②他分野による EI/ECSE への影響そして③実践現場の変化。

4. 文献 Dunst, C.J., & Trivette, C.M., (2009). Capacity-building family-systems intervention practices. *Journal of Family Social Work*, 12, 119-143.

(TRAN Ngoc Tra My, MANABE Ken)

Figure 1 幼児期特殊教育に関する法律と Dunst らの理念の変化過程

